

# 祖父母孫関係の行方

～情報通信機器は、祖父母と孫を直接つなぐツールとなるのか～

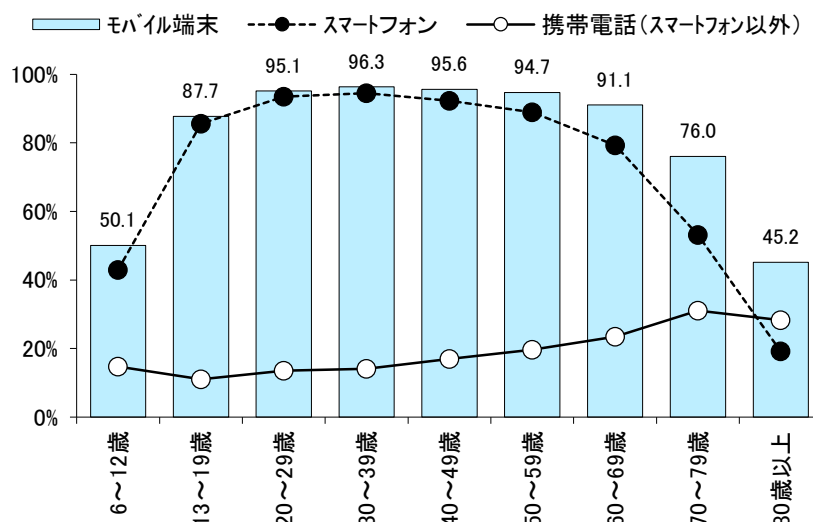
ライフデザイン研究部 主任研究員 北村 安樹子

## 1.情報通信機器とインターネット利用の広がり

5月末に公表された通信利用動向調査によると、個人のモバイル端末（スマートフォン+携帯電話）の保有割合は83.9%となっている。年齢階級別にみると、20代から60代までは9割を超え13～19歳でも9割近くに達しているが、70代以上と6～12歳ではこれらの世代に比べるとやや低い（図表1）。内訳をみると、70代まではスマートフォンが多数派であるが、70代と80代以上の高齢者ではスマートフォン以外の携帯電話を保有する人も一定の割合を占める。

家族や他者とのコミュニケーションという側面に注目した場合、スマートフォンをはじめとする多様なモバイル端末に加え、パソコンやタブレット等の情報通信機器を介して通話やメール、SNS等を利用する人もいる。家族との共用や機器の使い分けなど利用方法には多様な実態があり、メールや写真の送受信等に関してはスキルの個人差もある（図表2）。このため一概にはいえないものの、自分専用の機器や連絡先をもつ人は、時代とともに増えてきたと考えられる。

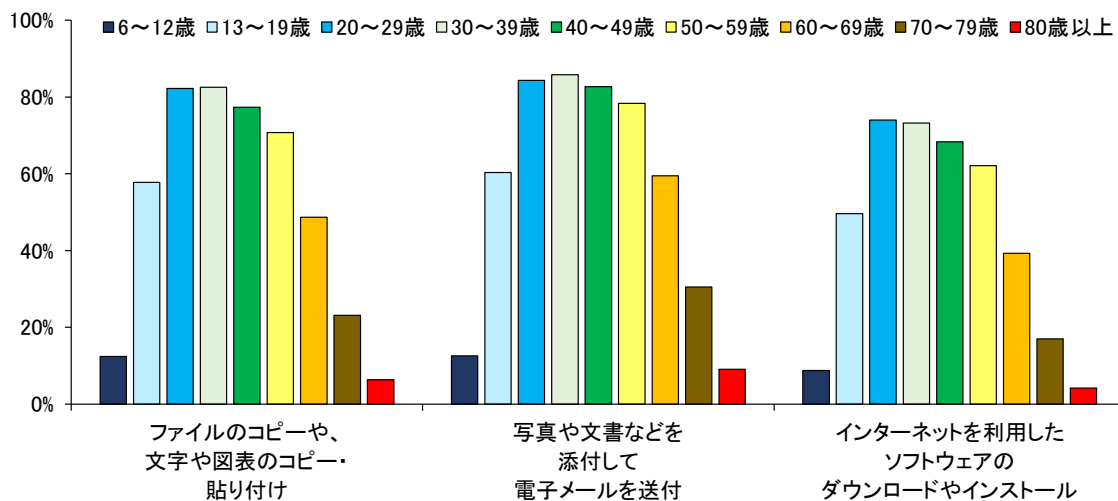
図表1 モバイル端末の保有状況(年齢階層別)＜複数回答＞



注：無回答を含む。モバイル端末は携帯電話、スマートフォンのうち1種類以上。

資料：総務省「令和3年通信利用動向調査」より作成。調査時点は2021年8月末。

図表 2 ICTスキル(年齢階層別) &lt;複数回答&gt;



注 1: 全体の上位 3 項目を掲載。他の選択肢には「エクセルなどの表計算ソフトを使用した簡単な計算(足し算や引き算など)」「パソコンにプリンタやカメラなどの機器を接続」「パソコンと他の機器(スマートフォンなど)の間でのデータのやり取り」「パワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを使用した資料の作成」「プログラミング言語を使用してコンピュータプログラムを作成」「上記のいずれもできない」がある。

注 2: 無回答を含む。

注 3: 設問文は「あなたはパソコン、スマートフォン、タブレット型端末等を使用して、次のことができますか」。

資料: 図表 1 に同じ。

## 2. 祖父母孫関係の行方～情報通信機器は、祖父母と孫を直接つなぐツールとなるのか～

近年では、小中学生や就学前の低年齢の子どもにも、スマートフォンをはじめ様々な情報通信機器を利用する機会が広がっている。親のスマートフォンや家族で共用する機器を含めて、それらを多様な形で自ら利用することや、家族や他者がそれらを利用する様子に触れる機会も、以前に比べ早い時期からあるだろう。

一方で、対面機会や固定電話でのやりとりを含めて、祖父母と孫が直接連絡を取り合う機会は限られていることを示すデータもある。少し前のデータになるが、2014年に当研究所が行った祖父母世代への調査結果では、最も親しい孫であっても、直接連絡を取り合うと答えた人は少数派で、母親や父親を介して連絡を取り合うと答えた人の方が多かった(図表 3)(注 1)。孫の年齢や連絡の目的等にもよるが、祖父母や孫だけに連絡をとりたい場合でも、相手の都合は親に聞かなければわからないケースや、連絡方法やタイミングの判断・調整に親が関与するケースが多かったのではないだろうか。

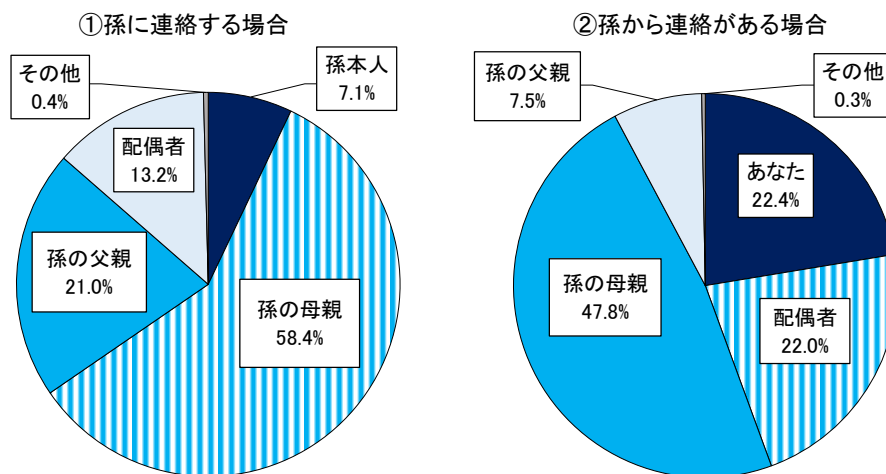
調査から数年が経過し、孫世代が情報通信機器を使い始める時期はさらに低年齢化している。共働きや祖父母との別居の増加等を背景に、子や孫と祖父母がスマートフォン等で連絡をとり合う機会がある人もいるだろう。また、孫の成長や時間の経過とともに家族関係が変化し、直接のやりとりが減ったり、行われなくなったりして以降も、多様な手段を通じて孫の成長を静かに見守れること、見守ってくれる人がいる・

いたと感じられることが、祖父母と孫の双方にとって新たなつながりの形といえる場合もあると考えられる。

祖父母世代との別居が標準となるなか、情報通信機器を介して子育てや介護の間接的な支援のほか、経済面での支援も行えるようになり、祖父母と孫がリアルの時間を共有する機会が減っているケースもあるだろう。一方で、情報通信機器の広がりによって、孫と祖父母は親を介すことなく直接つながる手段をもつ時代になった。そのような距離感が悪いこととはいえ、孫や祖父母が直接つながる手段を得ても、それをどう感じるかには、リアルで共有する日常の時間や、スマホを介したやり取りを含め積み重ねられていく関係構築のプロセスが大きくかわると思われる。

コロナ禍を通じて別居する家族との対面機会が減少した祖父母も多かったなかで、情報通信機器は物理的な距離を超えてコミュニケーションやサポートを行う新たなツールとなってきた。それらの大きな恩恵とともに、祖父母と孫がリアルの時間をともにすることの意味や価値について、あらためて考えた親や祖父母も多かったのではないだろうか。

図表 3 最も親しくしている別居の孫との連絡の取り方(性別)



\*1: 最も親しくしている別居の孫に関する回答結果。設問文は、①あなたが、そのお孫さんに会ったり、連絡をとる場合、最初に連絡したり、相談する人は、次のうちどなたですか、②そのお孫さんが、あなたに会ったり、連絡をとる場合、最初に連絡をしたり、相談をする人は次のうちどなたですか。

\*2: ②孫から連絡がある場合については「孫がまだ自分で連絡をとれない」と答えた人を除く。

資料: 第一生命経済研究所「孫の将来への関心と孫とのコミュニケーションに関する調査」。回答者は全国の孫がいる55~74歳の男女1,000人。インターネットにより実施。調査時期は2014年11月。

#### 【注釈】

1) 図表3②孫から連絡がある場合についての回答を孫の学齢別にみた場合、学齢段階が高い孫の方が、親を介さず直接連絡があると答えた割合は高い。しかしながら、最も親しい孫が高中生や大学生の場合も、「孫の母親」を介して連絡があると答えた割合がこれを上回っている。

る。

**【関連レポート】**

- 1) 北村安樹子「祖父母による孫育て支援の実態と意識～祖父母にとっての孫育ての意味～」  
2015年7月  
(<https://www.dlri.co.jp/report/ld/2015/rp1507b.html>)
- 2) 北村安樹子「「今後関係性を深めていきたい人」は？～ライフコースの多様化と人づき合いのライフデザイン～」  
2022年1月  
(<https://www.dlri.co.jp/report/ld/179430.html>)
- 3) 北村安樹子「暮らしの視点(8):親子の「程よい距離感」への新たな志向～リアルな「近さ」がもたらす安心と自立のバランス～」  
2021年4月  
(<https://www.dlri.co.jp/report/ld/153601.html>)